

抄 訳

チャールズ・ディケンズ ボズのスケッチ集(2)

原 英一 訳



解 題

ここに訳出したのはディケンズの最初の作品集『ボズのスケッチ集』(*Sketches by Boz*, 1836)の一部である。本誌創刊号には「我が教区」(*Our Parish*)の中から「教区役人、教区の消火ポンプ、学校教師」と「牧師補、老婦人、退役海軍大佐」、「教区役人選挙」、「ブローカーの助手」を掲載した。今号では「情景」(*Scenes*)から次の6篇のスケッチを訳出する。「朝の街頭」、「夜の街頭」、「セヴン・ダイヤルズ」、「モンマス・ストリートでの瞑想」、「民法博士会館」、「ロンドンのレクリエーション」。

原テキストは『オックスフォード挿し絵入りディケンズ』(*The Oxford Illustrated Dickens*, London: Oxford UP, 1957)。挿し絵はクルックシャンク(*George Cruikshank*)によるもの。

一昨年、『ボズのスケッチ集』の短篇フィクション(*Tales*)を訳した『ボズのスケッチ—短篇小説編—』(上・下)が岩波文庫に収録された。ディケンズ愛好者にとって待望のまとまった翻訳かと期待されたが、おそるべき悪訳で、失望甚だしかった。あまりにも「見事な」誤訳だらけなので、ディケンズの英語をまともに読めない人間が訳したことが歴然としている。さらに悪質なのは、英語がわからなければわからないと認めればよいものを、自分勝手な文章を創作してごまかしていることだ。これはまことに始末が悪い。原文を知らずに読んでみると、いかにも達者でなめらかな日本語なので、あたかもディケンズの作品の生命を表現することに成功しているかのような誤解を与えてしまうのだ。こんなものが岩波文庫に入っているとは信じがたい。詳しくは、『ディケンズ・フェロウシップ日本支部年報』第27号所載の金山亮太氏による書評を参照していただきたい。

翻訳というものはおそろしいものである。ここに訳出したものにも、誤訳が必ずあるに違いない。(実際、十数年ぶりに読み返してみても、いくつも見つけたが、まだ残っているだろう。)しかし、それを恐れているのは翻訳はできなくなってしまふ。生硬な日本語はお許し願うとして、自らの無知・無能を悪達者な日本語で糊塗することだけはしなかったことを、この文字通りの拙訳のせめてもの言い訳としよう。

情 景

朝の街頭

夏の日の朝、日の出の一時間前のロンドンの街頭が示す光景たるや、あさましい享楽を追い求めた末に、あるいは同じ程度にあさましい仕事を営んだ結果として、その光景となじみとなってしまったごく少数の者たちにとってすら、非常に印象的なものである。他の時刻なら何時だっておおぜいの活発な群衆でごった返していたその通りがひっそりと静まり返り、一日中生气と活動に満ち溢れていた建物群が、今は静かにしっかりと戸締まりされている様子など、何とも冷たくわびしい寂寥感がただよっている。こうした雰囲気は、とても心に沁みるものだ。

日の出前に家に帰り着くであろう最後の酔っ払いが、昨晚のざれ歌の一節をほえたてながら、重い足取りで、ちょうど今よろよろと歩いていったところだ。貧乏と警察とに追い立てられたあげく、街頭に最後まで取り残された宿なしの浮浪者も、どこかの舗装された街角でこごえた手足を丸めながら、食べ物と暖かしの夢を見ている。酔っ払いたちも、放蕩者たちも、みじめな者たちも、姿を消した。市民たちのなかでもしらふで堅気の連中も、その日の仕事のためにまだ起きだしてはいないので、死のような静けさが街路をおおっている。早朝の灰色のくすんだ光りの中では、冷たく生氣のない死の形相そのものが街路に染めつけられたかのようなのである。大通りの方の辻馬車の待合場も無人だ。終夜営業の酒場も閉まった。そして、みじめな道楽者たちのお気に入りの遊歩道にもひとけはない。

街角には眼前の無人の光景をものうげに見つめている警官の姿が、ときたま見られるだけである。ときとして遊び人じみた顔つきの猫が、こそこそと通りを横切って走って行く。その猫はやはり悪賢く用心しながら自分の縄張りに降りてゆく。まず天水桶の上にぴょんと飛び降り、次にごみ捨て穴の上に、そしてそれから敷石の上に飛び降りるのだ。まるで自分の昨晚の情事が公衆にばれないようにすることに、自分の名誉がかかっているとでも言わんばかり。あちこちで窓が少し開かれているのは、暑い気候のせいで中の人間が寝苦しさを感じている証拠だ。そしてまた、窓のブラインドを通して灯心草ろうそくの光りが弱々しくちらちらと見えるのは、誰かが不寝番か病人の看護をしているのだろう。こういったわずかな例外はあるが、街路には生き物の気配はなく、家々には住人の気配もない。

一時間がゆっくりと経過する。教会の尖塔と主だった建物の屋根が朝日の輝きにかすかに染まる。すると街路は、ほとんどそれと分からないほどゆっくりと、その活動と生氣を取り戻し始める。市場に向かう荷馬車がゆっくりがたごとと進んで行く。眠たげな荷馬車引きが、疲れた馬をいらだった様子で急き立て



George Cruikshank

る。あるいは、果物籠の上でのうのうと寝そべっている少年を起こそうと、無駄な努力を払っている。この少年、不思議の都ロンドンをわが眼で見たいものだとし長い間好奇心をつのらせていたはずなのに、幸福な眠りの中でそれをすっかり忘れてしまっているのだ。

奇妙な外見の、粗野で眠そうな顔つきの動物たち、馬丁と貸し馬車駆者の中間のような連中が、早朝営業の酒場のシャッターを降ろし始め〔当時の「シャッター」は取り外すものなので、「シャッターを降ろす」とは店じまいではなく開店を意味する〕、街頭での朝食のため

のいつもの用意がそろった小さな厚板のテーブルが、いつもの場所に姿を見せる。頭の上に果物の重いバスケットを載せたたくさんの男や女（主として後者）が、ピカデリーの公園側を、コヴェントガーデンに向かって骨折りながら進み、次から次へと急ぎ足で踵を接しつつ、そこからナイツブリッジの道路の曲がり角まで、長くゆるやかな線を形作る。

そちこちで、その日の弁当をハンカチに結び付けた煉瓦工が、きびきびした足取りで仕事に向かい、また時には三、四人の男子生徒の小集団が、こっそり水浴びをしに行こうと、舗道の上を陽気にはしゃぎながら駆けてゆく。彼らの明るい歓声は小さな煙突掃除の少年と強烈な対照をなしている。お情け深い法律により、大声で呼ばわって自分の肺を危険に陥れることが禁じられているものだから、この少年は腕が痛くなるまでノックし、呼び鈴を鳴らした末に、女中が偶然眼をさましてくれるまで、戸口の石段で辛抱強く腰を下ろしているのだ。

コヴェントガーデンの市場とそこに続くいくつもの通りには、四頭の頑丈な馬に引かれたずっしりと重い木材用荷馬車から、肺病病みのロバに引かれ、じゃらじゃらと鈴を鳴らして進む行商人の荷車に至るまで、形も大きさも種類も実にさまざまな馬車が群がっている。すでに舗道には、腐ったキャベツの葉やらくずれた干し草の束やら何やら、野菜市場につきものの何とも言いがたい、ありと

あらゆる屑が散らばっている。男たちはわあわあ叫び、馬車はがたと後ずさり、馬はヒヒンと鳴き、少年たちは喧嘩し、籠を抱えた女たちはぺちやくちゃおしゃべり、パイ売りは自分のパイがいかに上等かを長々とまくしたて、ロバがいなく。こうした音や、その他の無数の音が、ロンドン子にとってすら耳障りな複合音を形成していく。それは初めてハラムス [コヴェントガーデンの南東角にあるホテル] に泊まっているおのぼり紳士たちには、この上なく不愉快なものなのだ。

さらに一時間が経過すると、一日がよいよ本格的に始まる。熟睡しているふりをして、「奥様」が鳴らす呼び鈴を半時間もの間すっかり無視していた雑役女中は、「旦那様」(奥様からそのためにわざわざ寝巻姿で踊り場まで送り出されたのだが)から、もう六時半だぞと言われて、いかにももっともらしく、あら大変、という様子を見せて、突然眼をさまし、ひどく不機嫌に階下へ降りる。女中は、マッチをすりながら、石炭や台所のレンジも自然発火の法則があてはまってくれりゃいいのと思う。やっと火がつくと、彼女はミルクを運び込もうと通りに面したドアを開ける。すると、およそこの世で最も不可思議な偶然によって、お隣の女中もちょうど自分のミルクを取り入れようとしている。同じく途方もない偶然のなせるわざで、お向かいのトッドさんの店の若衆も、親方の店のシャッターを降ろしているところだ。必然のなりゆきで、女中はミルクを手にしたまま、ベツティー・クラークに「おはよう」と一言あいさつするために、お隣りまでほんのちょっと足を伸ばす。するとトッドさんの店の若者も向かい側にほんのちょっと足を伸ばして、二人に「おはよう」と言う。しかも、このトッドさんの店の若者たるや、このパン屋の主人本人と同じくらいハンサムで魅力的なものだから、会話はたちまち面白くはずんでゆく。もしベツティー・クラークの行動をいつも監視している女主人が、自分の寝室の窓を怒りこめてたたかなかつたら、話はさらに盛り上がっていたはずだ。その音を聞くと、トッドさんの店の若者は、来たときよりもずっと急いで店の方に戻りながら、涼しい顔で口笛を吹こうとこころみる。そして、二人の女中もそれぞれの家に駆け戻り、びっくりするほど静かに通りに面したドアを閉める。しかしながら、一分後にはそれぞれが前の居間の窓から首を出す。ちょうどその時通り過ぎた郵便馬車を確かめるためというのが表向きの理由だが、実際にはトッドさんの店の若者をもう一目見るためだ。若者の方は、郵便も好きだが女の方がもっと好きというわけで、郵便物にちょっと目を通すと、女たちの方を長々と見るのである。こうして関係者一同、大いに満足するのであった。

郵便馬車の方とはいえば、やがて駅馬車の発着場にさしかかる。そこでは朝の出発便の乗客たちが、到着便の乗客たちをびっくりして凝視している。到着した人々は青白く、陰気な表情をしており、明らかに旅行によって生みだされる例の奇妙な気分に影響されている。昨日の朝の出来事がまるで少なくとも半年前に起こったことのように感じられ、二週間前に別れてきた友人たちや親類たちが、別れて以来変わりなく達者でいるだろうかと、大真面目で心配しているのであ

る。駅馬車発着場は活気に満ちていて、ユダヤ人たちや得体の知れない連中から成るいつもの群衆が、今出発しようとしている馬車を取り巻いている。この連中は、なぜかは皆目わからないが、馬車に乗ろうとする人間ならだれであろうと、少なくとも六ペンス分のオレンジやペンナイフや手帳や去年の年鑑やペン入れやスポンジや小型の戯画集が絶対に必要なはずだと確信しているらしいのだ。

さらに半時間経過すると、まだ半ば空っぽの通りに太陽がその明るい光線を元気よく投げかけ、徒弟の陰気なけだるさを振り払うくらい強く輝く。その徒弟は、店を掃除したり前の舗道に水をまいたりする仕事を一分ごとに休んでは、同じような仕事をしているもう一人の徒弟に、今日はひどく暑くなりそうだと言ったり、あるいは、右手を両目の上にかざし、左手は帯の上に置いて、「ワンダー号」とか「タリーホー号」、あるいは「ニムロド号」その他の急行馬車が見えなくなるまでじっと見つめながら立っていたりする。それから、急行馬車の外側座席に乗っている乗客たちをうらやましく思いつつ、また、学校に行っていた頃の「田舎の方にある」古い赤煉瓦の家のことを思い出しながら、再び店に入ってゆく。ミルクと水、厚いパンとかき集めた屑しか食べられない惨めさも、子供たちが遊びまわった緑の野原や、向こう見ずにも緑の池に落ちてしまっただけのお仕置を受けたことや、その他の学校生活に結びついたさまざまな事物についての楽しい思い出の中に、薄れて消えてゆくのである。

馭者の両脚と外側の膝かけの間にトランクやバンドボックスを入れた辻馬車が、街路をきびきびした足取りでがたごとと進み、駅馬車発着場や定期蒸気船埠頭へと向かう。そして、待合場にいる辻馬車の馭者や貸し馬車屋たちは、自分たちのすすけた乗り物の装飾部分を磨き上げる。前者は、人々が「足の速い馬付きのまっとうな辻馬車より、あのけだものの群れみてえな乗合馬車なんぞ」をなぜ好むのかいぶかしみ、また、後者の方は、人々が「ぜってえ暴走したりなんかしやしねえ二頭立ての立派な貸し馬車に乗れるってえのに、あのぶっそうな辻馬車なんぞ」に自分の首を預けて、よく平気なものだと感心している。この慰めは貸し馬車の馬というものとはそもそもまるで走ったためしがないということを考えてみれば、疑いもなく事実に基づいたものである。「但し例外はあらあね」と列の先頭にいた抜け目ない馭者が言う。「一頭だけ例外があつてな。そいつは後ろに向かって走ったんだぜ。」

どの商店も今や完全に開いており、徒弟や店員は、その日のための掃除をしたり、ウインドウを飾ったりで忙しい。町のパン屋の店は、朝一番のロールパンの束が引き出されるのを待ち受ける召し使いや子供たちでいっぱいだ。この作業は、郊外の方だったらゆうに一時間前に済んでいたはずである。というのは、サマーズやカムデン・タウン、イスリントンやペントンヴィルに住む早起きの事務員たちは、続々と町に流れ込みつつあり、あるいはチャンセリー・レーンや四法学院の方向に向かいつつあったからだ [徒歩とはいえ、ロンドン郊外の住宅地から中心部へ向かう通勤者たちの群れという現代的風景が、1830年代にすでに見られることは興味深

い]。家族が増加するのと同じ割合で給料が増えてきたなどということは決してなかった中年の男たちが、会計事務室の他には明らかに何の目的も見えない様子で、着実に足をを進める。彼らは、この二十年間というもの（日曜日を除く）毎朝会ってきたものだから、出会ったり追い越したりするすべての人間の顔は見知っているのだが、その誰にも話しかけることはない。偶然にも個人的な知り合いに追いついたりすることがあれば、急いでちょっと挨拶を交わし、それから、その時の自分の歩く速度しだいで、その人の傍か、あるいは前を歩き続けるのだ。握手をしたり、友人の腕を取ったりということに関しては、それは給料に含まれてはいないことだから、そんなことをする権利は自分たちにはないと、考えているかのようである。大きな帽子をかぶった事務所勤めの小さな少年たち（彼らは少年になる前に大人になってしまった連中だが）、この連中は念入りにブラシをかけた上着と、この前の日曜日には白かったのに今やたっぷりとほこりとインクをくっつけたズボンとを身に着けて、二人ずつ組んで急いで行く。菓子職人の家の戸口にほこりをかぶった缶に入れられて、いかにもうまそうに陳列されている、鮮度の落ちたタルトを購入するためにその日の食事代を投資したくなる気持ちを押さえるには、明らかにかなりの精神的葛藤を必要とする。だが、自分たち自身が重要人物たることや週七シリングを稼いでいることなどの自覚が助けになる。そこで彼らは帽子をさらにもう少し片側に押しやって、途中で出会う婦人帽子屋やコルセット屋の女徒弟たちひとりひとりのボンネットの下を覗きこむのである。哀れな娘たち——彼女らは社会の中でいちばんこき使われ、賃金は最低で、またあまりにしばしば、いちばん虐待されている階級なのだ。

十一時になると、新たな人々の一団が街路を満たす。店のショーウィンドウの品物は魅力的に陳列されている。白いネッカチーフとこぎれいな上着を着けた店員たちは、たとえ命がかかっていたとしても、窓掃除なんぞとうていできやしませんよといったふうに見える。コヴェントガーデンから荷馬車の姿は消え、荷馬車引きたちは帰り、行商人たちは郊外のいつもの「縄張り」に向かった。事務員たちは事務所に、一頭立て二輪馬車、辻馬車、乗合馬車、そして乗用馬は、それぞれの主人たちを同じ目的地へと運んでいる。街路は、華やかな者とみすぼらしい者、金持ちと貧乏人、怠惰なものと勤勉な者などの膨大な人々の流れとなり、こうして我々は真昼の熱気と喧騒と活動に達するのである。

夜の街頭

しかし、ロンドンの街路をその栄光のまさに頂点で見ようとするならば、暗く、どんよりのした陰鬱な冬の夜にしくはない。舗道を、その汚物を浄化させ

ずに、べとべとさせるにはちょうど十分な湿気がゆるやかに忍び寄り、あらゆる物体の上にたれこめた重くけだるい霧が、周囲の暗やみと対照をなすがために、ガス灯をいっそう明るく、こうこうと明かりのともった店をさらに華やかに見せている。このような夜に家にいるすべての人々は、できる限り心地よく快適にしようという気分になるし、街路を歩く人々が、自分の家の暖炉の傍に腰をおろしている幸運な人々をうらやましく思うのもいかにももっともなことだ。

より広くて上流の街路では、食堂兼客間のカーテンはしっかりと閉じられ、台所の火はあかあかと燃え上がり、熱い夕食のうまそうな蒸気が、中庭と街路をしきる柵の傍を疲れた足取りでとぼとぼと歩く空腹の旅人の鼻孔をくすぐる。郊外ではマフィン売りの少年が、いつもよりもずっとゆっくりと、小さな街路を鈴を鳴らしながら進んで行く。というのも、四番地のマックリン夫人が、通りに面した小さなドアを開け、全力をこめて「マフィンをちょうだい！」と叫ぶやいなや、五番地のウォーカー夫人が居間の窓から首を出して、やはり「マフィンをちょうだい！」を叫んだからだ。しかも、ウォーカー夫人がその言葉を叫び終わらないうちに、向かい側のペップロー夫人がペップロー坊っチャマを解き放つ。彼は、遥かに見えるバター付きのマフィン以外の何物もそれを喚起することは不可能であるような猛スピードで街路を突進して来て、マフィン売りの少年を力づくで引き戻してしまう。そこでマックリン夫人とウォーカー夫人は、その少年の手間を省いてやると同時にペップロー夫人にちょっと隣人としての言葉をかけるために、向かい側まで走って行き、ペップロー夫人の家の戸口でマフィンを買うことになる。その時、ウォーカー夫人が自発的に陳述したところによれば、「うちのやかんがちょうど沸騰しているところだし、カップや皿もちゃんと用意してあるし」、なにしろ外はこんなひどい晩なものだから、おいしい熱いお茶でもゆっくり飲もうと決めたところだったのだそうだ。きわめて不思議な偶然の一致であるが、他の二人のご婦人も同時に同じ結論に到達していたのであった。

ひどい天気のことやらお茶の効用についてのちょっとしたおしゃべりをし、概して男の子というものは手に負えないものであるが、ペップロー坊っチャマだけは例外的に気だてがよいといった脱線もまじえたりしていると、ウォーカー夫人が、夫が通りを歩いて来るのを見かける。そして、かわいそうにあの人は造船所から泥まみれで歩いてきたから、お茶を飲みたがっているのにちがいないわ。彼女はたちまちマフィンを手にして、向かい側に走って行く。マックリン夫人もそれにならい、ウォーカー夫人に二言三言話しかけると、全員がそれぞれの小さな家に飛び込んで、それぞれの小さなドアをびしゃりと閉じてしまう。そのドアは、その後夜の間は開けられることはない。ただ、九時にやって来る「ビールの出前人」に対しては例外として開かれる。この男はお盆の前にランタンをつけて回ってきて、ウォーカー夫人に「昨日のタイザー」[*The Morning Advertiser*, 1794年創刊の新聞、現在も週刊誌として刊行中；この時代には新聞・雑誌類はパブに備え付けられていて、予約して順番に回し読みするのが普通だった]を貸してやりながらこう言うのだ。

ポットも抱えていられねえくらいだし、新聞なんか感じられもしねえ、何しろ今夜はあの煉瓦工場で人が凍死した夜を別にすりゃあ、今まででいちばんのひどい寒さだもんなあ。

天候が変わって厳しい寒波が到来するんじゃないかという予言的な会話を街角の警官とちょっと交わした後で、九時のビールの出前人は主人の店に戻り、その晩の残りを酒場の暖炉の火を一生懸命おこしたり、その周囲に集まったお偉方たちの会話に敬意をこめて加わったりして過ごすのである。

こんな夜にはマーシュゲートとヴィクトリア劇場界隈の街路は、汚濁と不快の外観を呈しており、それはその周りをぶらついている集団によって、少しも減ぜられることはない。色とりどりのランプの素晴らしい意匠を上飾った、小さな錫地金でできた焼きジャガイモ屋のおやしるも、いつもほど陽気には見えない。腎臓パイの屋台とはいえば、その栄光は影も形もないのだ。油紙で作られ、人物画で装飾された透明なランプの中の蠟燭は、五十回も吹き消されていたものだから、腎臓パイ売りも、火をもらうために隣の居酒屋まで走って往復するのにすっかり疲れはて、もう照明がなくてもしかたがないと諦めてしまったので、彼の存在を示す印といえ、彼がお客に熱い腎臓パイを手渡すために携帯用オープンを開ける度に、通りを長い不規則な列になって飛んで行く明るい火花だけという始末である。

ヒラメ売り、牡蛎売り、果物売りたちは、お客を呼び込もうと無駄な努力を続けながら、下水溝のところであてもなくぐずぐずしている。そして、普通は街路で遊び興じているぼろ服の少年たちも、どこかの突き出した戸口か、チーズ屋のキャンパス地のブラインドの下に小さな群れになってうずくまるようにして立っている。チーズ屋では、ガラスの覆いなどない大きな燃えさかるガス灯の下で、明るい赤や薄い黄色のチーズの巨大な山と、そこに交じった黒ずんだベーコンの小さな五ペンス分の切り身や毎週仕込まれるドーセットチーズの樽、それに「最良の生チーズ」のぼんやりしたロールなどが展示されている。

ここでは彼らは、この前ヴィクトリア劇場の天井さじきに半額で入場したことがあったので、演劇論に興じている。毎晩アンコールされるあの素晴らしい戦いを賞賛し、ビル・トンプソン [ヴィクトリア劇場の俳優の一人] が二回宙返りをしたり、水夫のホーンパイブ踊りの摩訶不思議な複雑な動きをやっているのける、他の追隨を許さぬやり方について長広舌をふるうのだ。

時刻は十一時近く、こんなにも長い間細かく降り続いてきた冷たい霧状の雨は、いよいよ本格的などしゃ降りとなり始めている。焼きジャガイモ屋は姿を消しており、腎臓パイ売りは自分の屋台を腕に抱えてたった今歩き去ったところだ。チーズ屋はブラインドを引っ込め、少年たちも解散した。滑りやすくてこぼこの舗道上に絶え間なく響くパッテン [泥よけの鉄製の靴底] のかちやかちやという音、そして風が店のウィンドウに吹きつけるときの雨傘のぼさばさという音が、夜の厳しさを証明している。そして、防水布のケープをしっかりと巻きつけ

た警官が、頭上の帽子を押さえ、町角で吹きつけてくる雨まじりの突風を避けようとして後ろを向く姿からは、自分の眼前の展望を喜んでいるというにはほど遠い心境であることが窺える。

小さな雑貨屋のドアの背後にはひび割れたベルがあって、それが陰気にちりんと鳴ると、砂糖を四分の一ポンドとかコーヒーを半オンスとかを求める客が来るわけだが、その店じまいをしようとしている。一日中往来していた群衆も、急速に数が少なくなりつつあり、酒場からもれてくるどなり声や喧嘩の物音だけが、夜の陰鬱なしじまを破るほとんど唯一のものとなっている。

別な物音もあったのだが、それはもうやんでいる。すりきれた自分のショールの残骸を赤んぼうの痩せ細った体に巻きつけて腕に抱えた哀れな女が、同情した通行人から数ペンスを何とか引き出そうとして、何かの流行歌を歌おうと試みていた。彼女が得たものといえば、その弱々しい声に対する野卑な嘲笑だけである。彼女自身の青白い顔を大粒の涙が流れ落ちる。子供は寒さと空腹を感じていて、その低い、半ば押し殺された泣き声は、哀れな母親の悲嘆をいや増すばかりで、彼女は声をあげて嘆き、冷たく湿った戸口に絶望して沈み込むのだ。

ああ、これも歌であろうか。これほどに惨めな女の傍を通り過ぎる者たちの中で、歌おうとする努力そのものがどれほど心を苛むものか、魂も気力も沈み込みそうになるものなのかに思いをいたす人間が何と少ないことであろう。無情なあざ笑い。病と無視と飢餓とにさいなまれた女が、陽気な浮かれ騒ぎの時に幾度となく命を吹きこんでくれた喜びの歌の言葉を、かすれ声できれぎれに歌っている。これは決してあざげりの対象ではないはずだ。その弱々しく震える声は、貧困と餓えの恐ろしい物語を語り、この猛々しい歌の弱々しい歌い手は立ち去って行く。その前にはただ寒さと餓えによる死のみが待ち受けているばかり。

一時になった！色々な劇場から戻る集団が、泥んこの通りを歩いてゆく。辻馬車、貸し馬車、自家用馬車、そして劇場用乗合馬車が、がたごとと素早く通過してゆく。薄暗い汚れたランタンを手にして、大きな真鍮のプレートを胸に付け、この二時間というもの、どなったり走り回ったりしていた馬の給水人も、給水小屋に引っ込んで、パイプとパール [ジンを入れてお欄にしたビール] という肉体的快樂で自らを慰めている。劇場の半額の平土間席やボックス席の常連たちはそれぞれ別の飲食店へ集まってくる。厚切りの肉や腎臓やウサギや牡蛎やスタウトや菓巻や無数の酒杯が、タバコの煙りがたちこめ、人が走りまわり、ナイフがちやがちや鳴り、給仕たちがべちゃくちゃしゃべる、とうてい筆舌に尽し難い喧騒の中で出されるのである。

劇場通いの連中の中で音楽好きの者たちは、どこかの音楽愛好の会合へと赴く。どうやら面白そうだが、暫しそちらの方面へ彼らを追いかけてみよう。

広々とした立派な部屋に約八十人か百人の客が座り、テーブルの上の小さなしるめ細工の楽器を打ち鳴らし、ナイフの柄で、まるでトランク作りの職人みたいにこつこつと叩いている。彼らは中央のテーブルの上席で三人の「専門家諸



氏」によってたった今演じられた合唱にやんやの喝采を送っている。その三人のうちの一、緑の上着の襟のところから禿頭がかるうじて外に出ているという偉ぶった小男だが、そいつが議長役である。他の二人は彼の両側に席を占めている。声の小さな小肥りの男と、黒服を着た細面の浅黒い男だ。議長の小男はひどく面白い人物である。なにしろ、威厳があるのにあんなにへりくだっているし、あんな素晴らしい声をしているんだから。

「バスだ」と我々の近く、青い襟巻をした若い紳士が連れに言う。「バスだ。請け合ってもいいが、彼なら誰よりも低音が出せるさ。時にはあんまり低いんで聞こえないくらいなものな」まさにそうなのだ。彼がうなりながら、だんだんと低音になっていき、もう引き返せなくなってしまうのを聞いているのは、この世で最も楽しいことであり、彼が「我が心高原に」や「勇敢な鷹」などの曲で魂をふりしほるように歌うときの、印象深い厳粛さを見て感動を覚えないのは不可能である。小肥りの男の方もやはり感傷に溺れていて、「飛べ、我がベッシーよ、我とともにこの世から飛びさらん」とかいった歌を、女性のような甘い声と考えられるかぎり最高の誘惑的な調子で歌うのだ。

「諸君、どうか注文を出してくれたまえ——どうか注文をお願いします」と赤毛の青白い顔の男が言う。すると、ジン一杯、ブランデー一杯、そしてスタウトを何ポイントも、さらには特にマイルドな葉巻を、といった要求が部屋のあらゆる場所から大声で出されるのである。例の「専門家諸氏」はその栄光の頂点にあって、その部屋の中にある常連の中の知り合いに、これ以上はないくらい鷹揚で庇護者ぶった態度で、恩着せがましく会釈したり、あるいは一言二言相手を認知する言葉を投げかけさえもしている。

小さい茶色のシュルトゥに白のストッキングと靴を身にを着た、あの丸顔の小男は、喜劇的才能がある。無私を装いながらも、議長たる職責を担っているのは自分の力量のためであると内心意識している様子が入り混じっている様は、とりわけ満足させられるものだ。「諸君」とその偉ぶった小男は、議長の槌でテー

ブルを叩きながら言う。「諸君、ご静聴願いたい。我々の友人、スマッグインズ氏が歌ってくださるそうですぞ」「ブラヴォー！」と一同は叫ぶ。そして、スマッグインズは、声の調子を整えるために何度も咳払いをし、一、二度ひどく滑稽に鼻を鳴らして皆を喜ばせた後、一節毎にその歌詞自体よりもずっと長いララララ、トララララというコーラスが最後にくっついた滑稽な歌を歌う。この歌は限りない大喝采をもって迎えられ、それからどこかの野心家の天才が自ら吟誦を申し出て、その実演がみじめな失敗に終わった後、あの偉ぶった小男がもう一度槌を叩いてこう言う。「諸君、よろしければ我々が合唱を試みましょう」この宣言には耳を聳するばかりの拍手が起り、ちょっと血の気の多い連中は、心からなる賛意の表明として、スタウトのグラスを一、二本両足の間にたたき落としてしまう。これはまあ、おどけた趣向というもののだが、給仕を通して損害賠償の手続きを取らねばならない段になると、しばしばちょっとした口論の原因となる類のものなのである。

こういった場面が朝の三時か四時になるまで続けられるのだが、それが幕を閉じたあとにもなお、好奇心に満ちた新参者にとってはまた新たな場面が開かれることになる。しかし、それらすべてを、たとえ大雑把にしろ記述するとしたら丸一冊の本が必要となるだろうし、その本の中身はいかにためになるものであるとしても、決して愉快なものではないであろうから、我々もここでお辞儀をして、閉幕にすることといたそう。

セヴン・ダイヤルズ

[セヴン・ダイヤルズSeven Dials は、当時のロンドンでも最悪のスラム街の一つ。]

たとえトム・キングとあのフランス人がセヴン・ダイヤルズの名を不朽のものたらしめなかったとしても、セヴン・ダイヤルズが自らを自らの手で不朽たらしめたであろうと、我々は常に考えている [劇作家ウィリアム・トーマス・モンクリーフ (一七九四—一八五七) の書いた笑劇『ムッシュウ・トンソン』(一八二一)への言及。トム・キングという男がセヴン・ダイヤルズに住んでいたあるフランス人の家に「ミスター・トンブソンのお宅はこらちですか」と毎晩訪れて嫌がらせをする。これに対してフランス人が「ここムッシュウ・トンソンのおうちないある」と答える滑稽なやりとりが大受けして、他愛ない内容にもかかわらず、当時非常に人気を博した]。セヴン・ダイヤルズ！そこは歌と詩の領域だ——初めての感情の発露と最後の臨終の言葉の領域だ。キャトナックとピッツの名前 [いずれもセヴン・ダイヤルズに印刷所を構えていた大衆向け安物出版物、歌詞集、パンフレット、死刑囚の「いまわの際の告白」物などの出版業者]——安物雑誌が安物歌詞集にとって替わり、死刑が存在しなくなった時にも、呼び売り商人や手回しオルガンに

からみつくであろう名前によって神聖なものとされた領域なのだ。

この場所の構造を見てみたまえ。ゴルディオスの結び目 [古代小アジアのフリギア王国の王ゴルディオスが作った結び目で、誰も解くことができず、それを解いた者はアジアの支配者となるとされていた。マケドニアのアレクサンドロス大王が剣でそれを絶ち切り、自分がその予言されたアジアの帝王であることを示したという伝説がある] はそれなりに結構なものであるし、ハンプトン・コート迷路もそうだったし、ビューラ・スパーの迷路 [いずれもロンドン近郊の庭園に作られた迷路] もそうであるし、それを身に着ける困難さに匹敵するものといえば、もう一度外すことの困難さであるという、固い白の首巻きの結び目もそうであった。しかし、セヴン・ダイヤルズの複雑なもつれ方に比較できるものなどあるだろうか。通り、路地、小路、それに横町の、このような迷路など他にあるだろうか。ロンドンのこの入り組んだ部分に見られるような、アイルランド人とイギリス人の、このように純然たる混交がどこにあるだろうか。我々は上に言及した伝説の真実性に対する疑いを大胆にも主張するものである。性急な人間が、下宿人のいる家も含めて行き当たりばったり、トンブソン氏はおりませんかと尋ね歩き、多少大きな家であればどこでも、二、三人のトンブソン氏がいるに違いないと、ほとんど確信しているということについてなら、我々だって確かに想定できる。しかし、フランス人はどうかといえば—セヴン・ダイヤルズにフランス人などいるものか！ばかな！そいつはアイルランド人だったのだ。トム・キングは幼児期にろくな教育を受けなかったものだから、相手の男が言ったことの半分も理解できず、それでこれはフランス人に違いないと決めつけてしまったのだ。

よそ者が初めてセヴン・ダイヤルズにやってきて、ベルゾーニよろしく [ジョヴァンニ・パチスタ・ベルゾーニ (一七七八—一八二三)、イタリアの旅行家・考古学者。エジプトのピラミッドの調査などを行なった] 七つの薄暗い通路の入り口に立ち、どの道を取るべきか迷いながら周囲を見回してみると、彼の好奇心と注意とを決して短くはない時間惹きつけておくような、いろいろな事物を目にするであろう。彼が入り込んだ不定形の広場から通りや小路がありとあらゆる方向に突き出していき、家々の屋根に垂れこめて、この汚れた展望をぼんやりと閉ざされたものにして不健康な蒸気の中に消え去っている。そして、あらゆる角には、こんなところまで何とか入り込んできた新鮮な空気を少しでも吸い込もうとそこまで出て来たはいいが、すでに消耗しきっているので、もはや周囲の狭い路地に戻るだけの気力は失せてしまっているかのような一群の人々がいる。彼らの外見と住居を見れば、筋金入りのロンドン子でない限り、驚きで心が満たされるであろう。

片側では、小さな群衆が二人のご婦人の周囲に集まってきている。このお二人は午前中にジンやらビターズやら、いろいろな「三分の一グラス」をきこしめてきていたのだが、とうとう家庭内の差配の何らかの点に関して意見の相違をきたし、腕力に訴えることによってこの喧嘩に満足すべき決着をつけようとしているところであった。しかも、同じ家とか隣りのアパートに住んでいる他のご

婦人方が大いに面白がって、全員がどちらかの側に加担しているのである。

「あいつにかかっておいきよ、セアラ」一人の衣服を半分身に着けただけの年配のご婦人が励ましのつもりで叫ぶ。「やっちないなよ、もしあたしの亭主が、あたしの知らないうちに、昨日の晩あいつに一杯おごってもらってたりしたなら、あたしだったら、あのあばずれの眼ん玉を引っこ抜いてやるとこさ」

「どうかしたのかえ、奥さん」急いでこの現場に駆けつけたばかりの別な老婦人が尋ねる。

「どうかしたかだって！」と最初に話した女が、憎むべき交戦相手の方にあてつけるように答える。「どうしたもこうしたもないよ。かわいそうなサリヴァンの奥さんが、五人もの子持ちでさ、午後に雑役婦の仕事に出られないってときに、とんでもないあばずれどもがやってきて、旦那を誘い出したのさね、次のイースターの月曜日にゃ結婚して十二年にもなるうちゅうにさ、ついこの前の水曜日に一緒にお茶飲みしたときに結婚証明書を見してもらったから間違いねえさ。あたしゃさりげなくこう言ったのさ、ところでサリヴァンの奥さん、てね——」

「あばずれどもってどういうことさ」と割って入ったのは敵の擁護者の一人で、これはもう自分の手でもう一つ戦端を開いてやるぞと先ほどから意欲満々たるところを見せていたのである。「(「いいぞ」と給仕の少年が言葉を挟む。「そいつを始末しちまえ、メアリー。)」「あばずれどもってどういう意味さ」とこの擁護者は繰り返す。

「お前の知ったこっちゃないよ」と敵側は意味深長に答える。「お前の知ったこっちゃないよ。お前はうちに帰るな。そして、酔いがすっかりさめたところでストッキングの繕いでもするがいいや」

このいささか個人的なあてこすり、そのご婦人の飲酒癖のみならず、彼女の持ち衣装の状態までも引き合いに出してのあてこすりに、彼女は怒り心頭に発してしまい、それゆえ見物人たちの「やっちなえ」というしきりの催促に相当積極的に応えることになる。つかみ合いは全体に拡大してゆき、そして、安物の演劇宣伝ビラの表現を借りて言えば、「警官の到着、警察署内、そして印象的大団円」という結果になるのであった。

ジン酒場の周辺でぶらぶらしたり、道路の真中で口論している多くの集団に加えて、開けた場所にあるすべての柱には必ずそれを占有しているやつがいて、何時間もの間、物憂げな様子で忍耐強くそこに寄り掛かっているものだ。ロンドンのある種の階級の人間にとって、柱に寄り掛かること以外に何の楽しみもないというのはひどく奇妙なことである。我々は、常雇いの煉瓦職人などが、喧嘩を除けば、他の気晴らししているのを見かけたことなど全くなかった。ウイークデーの晩にセント・ジャイルズ [セヴン・ダイヤルズなどのスラム地区の中心にあった教会] を通ってみれば、煉瓦の粉と石灰塗料のしみのついたファスチアンの服を着て、柱に寄り掛かっているこの連中を見ることができるとの。日曜日の朝にセヴン・



ダイヤルズを通ってみたまえ。またしても、彼らが、ドラップか軽いコール天のズボンとブルーチャーブーツ [外羽式の長靴] を履き、青い上着と大きな黄色のチョッキを着て、柱に寄り掛かっているのだ。晴れ着を着こんだ人間が一日中柱に寄り掛かっていると!

これらの通りが独特の性格を備え、それぞれがその隣りの通りと極めて似通っているからといって、「ダイヤルズ」に初めて足を踏み入れた人間が直面する困惑が減じるなどということは決してないのである。彼は、汚い家並が点在し、下水溝でのたくっている半裸の子供たちと同じようにゆがんで不格好な建物からなる路地が、ときどき思いがけず現れる通りを進んでゆく。そちこちに小さく暗い雑貨屋の店があって、そのドアの背後にはひび割れたベルがついており、客の来店を告げたり、あるいは店の現金箱に対する情熱を幼い頃から育ててき

た若い紳士の存在を暴露したりするのである。また別の家は、まるで支えを求めように、低級なみすぼらしい酒場にとって代ったどこかの立派な堂々とした建物に寄り掛かっている。破れてつぎはぎされた窓の長い列には、「ダイヤルズ」が建造された頃に繁茂していたのかもしれない植物が、「ダイヤルズ」自体と同じくらい汚らしい容器に入ってさらされている。ほろ、骨、くず鉄、それに料理の残り物を買取る店は、小鳥屋やウサギ屋と清潔さを競いあっている。これらの店はそれぞれが箱船のようだと思いたいところだが、まともな分別を持った鳥であれば、そこを出ることを許されれば、二度と再び戻ることはないだろうと、どうしても確信を持たされてしまうようなものなのだ。どうやら思いやりのある人々が、貧困な虫たちのための避難所として建てたのではないかと思われるブローカーの店、昼間学校や三文劇場や訴状代書人や洗濯物しぼり機や舞踏会用または夜会用音楽などの広告が散りばめられたこの店によって、この題材の「静物画」が完成する。そして、汚らしい男たちや、不潔な女たち、むさくるしい子供たち、ばたばたと飛ぶ羽つきとやかましい羽子板、悪臭を放つパイプ、腐った果物、相当に危ない状態の牡蛎、弱った猫、鬱病の犬、それに骨と皮ばかりの家禽が、その陽気な付随物となっているのである。

家々の外見やその住人たちの有様に惹きつけられる点がほとんどないとすれば、そのいずれかをもっと仔細に見たところで第一印象を変えるようなことにはまずなりそうもない。部屋の一つ一つに別の間借り人がいて、しかもその間借り人の一人一人が、田舎の牧師補が驚異的に「生み殖やす」原因となるあの同じ神秘的な摂理によって、大体において大家族の長なのである。

店の主人は、おそらく焼いた羊の頭の販売業か、薪と灰受け石の販売業か、あるいは十八ペンスかそこらの流動資本を要する何かの販売業をやっていて、彼と家族とは店とその背後の小さな裏部屋に住んでいる。それから、裏の台所にはアイルランド人の労務者とその家族がおり、表の台所には、絨毯たたきその他の仕事をする職人がその家族と共に住んでいる。表の二階にはもう一人の男がやはり妻と家族を伴って住んでおり、裏の二階には「刺繍の仕事を引き受けていてえらく上品な服を着ている若い娘っ子」が住んでおり、彼女は「あたしの友達」のことをよく口にし、「下品なことには我慢できないわ」と言うのである。三階の表の方と、残りの間借り人たちは、下の階の連中の単なる複製のようなものであるが、裏の屋根裏に住んでいる落ちぶれ紳士だけは例外で、彼は毎朝一軒おいて隣のコーヒー店から半パイントのコーヒーを取るのである。その店はコーヒールームと呼んでいる表の小さな穴蔵のような場所を自慢にしている、そこには暖炉があり、その上にはお客に対して「間違い防止のために、配達時にお支払い下さるよう」丁重にお願いする文句が刻まれている。この落ちぶれ紳士はどこか正体不明のところがあるのだが、彼は孤独な生活を送り、半パイントのコーヒーに安物のパン、わずかのインクの他は、時々ペンを買うだけなので、仲間の間

借り人たちは、きわめて当然ながら、彼は作家だと思っている。そして、ダイヤルズでの目下の噂によれば、彼はウォーレン氏 [ディケンズが少年のときに働きに出されたウォーレン靴墨工場の経営者Robert Warrenと思われる]のために詩[商品宣伝用の韻文]を書いているのだそうだ。

さて、暑い夏の晩にダイヤルズを通して、家の様々な女たちが階段のところでおしゃべりをしているのを見かければ、誰でも彼らは和気あいあいであって、ダイヤルズの住民たちほど素朴な人々など想像もできないと思うことであろう。悲しいかな、店の主人は家族を虐待しているし、絨毯たたきの職人はその専門技術を自分の妻にも応用しているし、二階の表の主人は、自分と家族が夜床についているときに三階の表の主人が彼の(二階の主人の)頭上でダンスをし続けたことの結果として、三階の表の主人と果てしない反目を続けており、三階の裏の住人は表の台所の子供たちにあくまでも干渉するし、アイルランド人は一晩おきに酔っ払って帰宅しては、誰かれかまわず襲いかかるし、二階の裏の女は何かという金切り声で悲鳴をあげる。階と階の間で敵意が燃え上がり、地下室の男さえその平等を主張する。A夫人が「しかめ面をした」という理由でB夫人の子供をひっぱたく。するとただちにB夫人は、「悪口を言った」という理由でA夫人の子供に冷水を浴びせる。夫たちも巻き込まれ、喧嘩は全体のものとなり、そのもたらすところは襲撃であり、その結末は警察官ということになるのである。

モンマス・ストリートでの瞑想

[モンマス・ストリート Monmouth Street は古着屋街。そこで売られている古着は質流れ品や盗品であった。ミラーは、ここでの描写の中に見られるディケンズの想像力の独特の働きを論じている。J. Hillis Miller, "Fiction of Realism: *Sketches by Boz*, *Olivet Twist*, and Cruikshank's Illustrations,"

Ada Nisbet and Blake Nevisu, eds, *Dickens Centennial Essays*, 1970]

唯一の真実にして現実の一大古着市場たるモンマス・ストリートに、我々は常に特別な愛着を感じてきたのであった。モンマス・ストリートは、歴史の古さゆえに尊いのであり、有用であるがゆえに尊敬すべきなのである。ホリウエル通り [ロンドンのストランド街の北側にあった通り。古着屋街として知られたが、十九世紀末から二十世紀初頭にかけて取り壊された]など我々は軽蔑する。客の意向などおかまいなしに、人を無理やりきたならしい家に引きずりこんで、衣服をさっさと着せてしまう、あの赤髪赤髭のユダヤ人どもを、我々は嫌悪する。

モンマス・ストリートの住民たちは、まぎもれなく一つの階級である。穏やかで遠慮深い種族であり、たいていは深い地下室とか裏手の小さな居間に引きこもっており、めったに世の中には姿を現さない。ただし、夕方の薄暗がりと涼し

さの中では例外で、その時彼らは舗道に置いた椅子にすわってパイプをふかし、あるいは自分たちの愛くるしい子供たちが、幼い掃除人たちの幸福な一団であるかのように、側溝ではしゃぎ、跳ね回っているのを見つめていたりする。彼らの汚れた顔にはもの思いにふけるような趣があって、それは彼らが商売を好むことの確たる証拠である。また、彼らの住居は、常に深遠な思索に耽り、じっと腰を落ち着けてする仕事に深く従事している人々の中にはきわめてよく見られる、あの外見に頓着せず、個人的な快適さなど無視した特徴を備えている。

我々のお気に入りの場所が古い歴史を持ったものであることは、すでに示唆した通りである。「モンマス・ストリートのレース飾りの上着」は一世紀前には常套句だったのだが、今でも我々はその同じ品物をモンマス・ストリートで見つけることができるのだ。木製のボタンのついた水先案内人用大外套は長い裾のついたどっしりしたレース付き上着の地位を奪ってしまったし、大きな折り返しをついた刺繍されたチョッキはロール襟のついた市松模様のもに屈服し、奇抜な外観の角が三つついた帽子は、馭者流の平べったくつばひろのものに席を譲った。しかし、変わったのは時代の方なのであり、モンマス・ストリートではない。ありとあらゆる変化変遷を通して、モンマス・ストリートは、依然さまざまファッションの埋葬場所としてとどまっているのである。そして、現状の全体から判断すると、もうこれ以上埋めるべきファッションがなくなるまで、その地位にとどまるであろう。

我々は、これら高名なる死者たちの広大な木立の中を歩きながら、彼らによって生み出されるさまざまな空想にふけるのが好きである。ある時は上着の亡骸を、またある時は死んだズボンを、またある時は派手なチョッキの遺骸を、我々が思い描く誰かに着せてみて、その衣装の型や造りからそのかつての持ち主を眼前によみがえらせようと試みるのである。こんなふうには空想をめぐらせていると、並べられた上着の列がそっくりそのまま掛け金から飛び出してきて、その空想上の人間の周囲で自分勝手にボタンをはめてしまった。ズボンの列は、その人物に出会うため飛び降りてくるし、チョッキは早く着たいという苛立ちではちきれんばかりになり、半エーカーもの靴が突然ぴったり合った足を見つけて、足音高く通りを歩き去って行ってしまった。その音で我々もこの心地よい夢想からほとんど醒めてしまい、困惑した目つきのまま、モンマス・ストリートの住民たちの驚きの対象となり、反対側の通りの角にいる警官にはかなり怪しまれつつ、ゆっくりと退却する仕儀になったのである。

先日我々がこんな空想に耽りながら、実際にはサイズ二つ分も小さい編み上げの半長靴を、ある空想上の人物にはかせようと試みていたところ、ある店のウィンドウの外側に陳列されている何着かの衣服がたまたま目にとまった。たちまち閃いたのであるが、それらの衣服は異なる時期に同一人物が所有し身に着けていたものに間違いなく、それが今、あの時々起こる状況の奇妙な偶然の一致によって、同じ店で一緒に売り物として陳列されることになったのであった。こ

の考えは途方もないものに思われたので、我々は、そう簡単にはだまされないぞと固く決意して、もう一度その衣服を見た。いや、やはり我々は間違っていなかった。見れば見るほど前の印象が正確であったこと、確信を我々は深めるのであった。まるでその人の自叙伝が羊皮紙に清書されて我々の眼前に置かれているかのようにはっきりと、その人物の全人生がそれらの衣服の上に描かれているのであった。

最初のもは、つぎあてされすっかりしみだらけになったスケルトンスーツ [男児用のスーツの一種]、つまりベルトやチュニックが到来して、古い思想が消滅する以前に幼い少年たちが閉じ込められていたあのまっすぐな青い布地の筒みたいなしろもの一つだった。子供をひどくきつい上着の中に締め付けることによって、その少年の体格の完全な対称性を示すという独創的な仕掛けであって、



George Cruikshank

両肩には装飾用ボタンの列があり、その上でズボンのボタンを留めると、両脚が脇の下のところで引っかけられているように見えるのである。これが少年の衣服であった。それが町の少年のものであったことが見てとれた。その服の腕や脚は短めであり、膝のところは膨らんでいるが、これはロンドンの街頭の若者たち独特のものである。明らかに彼は小さな昼間学校に通っていた。もしそれがきちんとした男子校〔上流の家庭の子供が入る寄宿学校〕であったなら、床の上でそんなに遊んだり、膝をそんなに白くしてしまうことは許されなかったはずである。彼にはまた甘い母親がいて、半ペンスの小遣いをしょっちゅうもらっていたことが、ポケットのあたりや顎のすぐ下のところに何かねばねばしたものしみがたくさんあって、ここの商人の技術でもごまかせずに残っていることから十分に分かるのであった。彼の家はまずまずの家柄ではあったが、金が腐るほどあるというわけでもなかったようだ。そうでなければ、その服があればほど小さくなってしまってからようやく、あの裾が平らにカットされたジャケットとコールテンのズボンに移行するというのもなかったはずだ。このようないでたちで彼は少年学校に行き、文字の書き方を習った。しかも、彼がペンをよく拭いていた部分が証拠となるとすれば、かなりの濃さの黒インクを使用したらしいのである。

黒のスーツとジャケットはこじんまりした上着に変わった。彼の父親は亡くなっていて、母親が息子にどこかの事務所の走り使いの職を得させた。そいつは長いこと着古したスーツだ。放棄されるまでには古ぼけてすりきれてしまっていたが、最後まで清潔でしみ一つなかった。哀れな女だ。我々は、彼女が乏しい食事の時にも陽気さを装い、腹をすかせた息子が十分に食べられるように自分のわずかな食べ物も拒絶している様子を想像することができた。彼の幸福をいつも心配し、彼の成長に誇りを感じながらも同時に、耐えがたいほどつらい思いが時としてそこに混じる。彼が成長して大人になれば彼の昔の愛情は冷めてしまい、昔受けた親切な行為も記憶から薄れてゆき、昔の約束は忘れ去られてしまうだろう。その時には不注意な一言、あるいは一つの冷たい眼差しが自分に突き刺すような苦痛を与えるだろう。これらすべてのことが、そそれの場面そのものが眼前に展開されてゆくかのように我々の心に押し寄せて来るのであった。

こういったことはいつも起こっているのであり、我々は皆それを知っている。それなのに、我々は、今起り始めた変化を見たとき、あるいは見たと思ったとき（どちらでも何の違もないのだが）、そのようなことがわずかでもあり得るということにまるで初めて気付いたかのような悲しみを感じたのであった。次のスーツはあかぬけてはいるがだらしないものであった。派手なもののもりらしいが、あのすりきれた衣服ほど上品ではなかった。怠惰にぶらぶらと過ごして、ろくでもない仲間と付き合っていることが暗示され、未亡人の母の慰めは急速に消え去ったことを我々に語っているかのようであった。我々はその上着が、同じスタイルの三着か四着の同じ上着と一緒に、夜どこかの放蕩者の遊び場を

ぶらぶら歩き回っているのを想像することができた。想像するだって！いや、我々には見えるのだ。それはもう百回も実際に見てきたことなのだから。

我々はその同じ店のウインドーから十五歳から二十歳までの半ダースの少年たちに衣服を着させて、彼らの口に葉巻をくわえさせ、ポケットに手を入れさせて、彼らが通りをぶらぶらと歩いて行き、卑猥な冗談を言い、何度も悪罵を繰り返しつつ、角のところにとどまっているのを見ていた。彼らが帽子をさらにもうちょっと片側に傾けて、尊大な足取りで酒場に入ってゆくまで我々は決して彼らを見失わなかった。そしてそれから、我々は、母親がひとり夜遅くまで起きている寂しい家に入ってしまった。彼女が激しい心配にさいなまれながら部屋の中を歩き回り、時々ドアを開けては暗く人気のない通りを、もしかしたらという様子で覗き、何度も何度も期待を裏切られて戻ってくるのを見ていた。息子の粗野な脅し、いやそれどころか酔っ払って殴られたことにも耐えてきた彼女の忍耐の表情を見たのであり、またひとりぼっちのみじめな部屋で跪いた彼女の心の奥底からほとばしる悲痛な慟哭を聞いたのであった。

長い期間が過ぎて、上にかかっているスーツを放棄する頃にはさらに大きな変化が生じていた。そのスーツはがっしりした、肩幅の広い、胸板の厚い男のものであった。そして、その大きな金属のボタンのついた裾の広がった緑の上着をちょっと見ただけで誰にも分かるように、我々にもすぐに分かったのだが、これを身に着けた男は、必ずと言っていいほど足元には犬を従え、彼自身のまさに分身のような、どこかののらくら者の悪党を傍に引き連れて歩いていたようである。少年の時の悪行は大人になるにつれて増大したようであり、我々はその当時の彼の家のことを——そのような場所が家と呼べるとすればの話だが——想像してみたのであった。

我々は、顔は青白く、餓えて痩せ細った彼の妻と子供たちが寄り集まっている、家具もないむき出しの惨めな部屋を見た。男は彼らの嘆きの声を呪い、パンを求めてやかましく急ぎ立てる、元気のない赤子を抱えた妻を後に従えて、今戻ってきたばかりの酒場へとよろよろと歩いて行く。そして、街頭での口論と殴られた妻が大声でやり返す声を我々は聞いた。そしてそれから、空想に導かれて我々は首都のどこかにある救貧院へ赴いた。そこはいくつもの通りや小路が混み合った真中であって、不快な蒸気に満たされ、騒がしい叫び声が響いており、一人の年老いて体の弱った女が、息子のために救いを乞いながら、手を握ってくれる子供もなく、天からの汚れない風がその額に吹き寄せることもないまま、息の詰まるような暗い部屋で死の床についていた。冷たく意志を持たない凝視となって凍りついたその両眼を見知らぬ人間が閉じさせ、見知らぬ人間たちが、白く半ば閉じられた唇からつぶやかれた言葉を聞いたのであった。

すりきれたネッカチーフのついた粗末な、裾の平らなフロックとその他のひどく粗末な種類の衣服類が、この物語を締めくくっていた。牢獄、そして判決——おそらくは流刑か絞首刑であったのだろう。その時になって、もう一度少年時代

の不満もなくつつましい働き者に戻るためなら、あるいはたとえ一週間でも、一日でも、一時間でも、一分間でもよいから、再び命を与えられて、貧民の墓の中で腐敗しつつ横たわるあの冷たくぞっとするような遺骸に、激しい悔悟の一言を言い、心からの許しの一言を聞くことができさえするなら、その男はいかなる代償でも払ったことであろう。彼の子供たちは路上で暴れまわり、その母親は困窮した未亡人である。どちらも父であり夫であった男の悪名による深い不名誉に深く汚されていて、彼が何千マイルもの彼方の地で、おそらく何年もかかる長わづらいの末に死んでしまうことになった、その同じ断崖を、全くの必然によって転がり落ちてゆくのであった。この物語の結末についての手掛かりはなかったが、その行き着く場所について推測するのはたやすいことであった。

我々はさらに一、二歩先に進み、我々の思考の本来陽気な調子を取り戻そうとして、現存する最高の革細工職人をも驚かすような速度と精度をもって、貯蔵室の棚一つ分の長靴や靴を空想上の足や脛に合わせるといふ仕事を始めたのであった。我々の心からなる敬意を喚起することになった特別な長靴——陽気で、気だてのよい、いかにも元気そうなトップブーツが一足あった。そして我々は、知り合いになって一分も経たないうちに、すばらしい、赤ら顔の愉快な市場園芸業者にそれを履かせてやったのである。彼にはまさにおあつらえ向きのしるものであった。トップブーツの上から彼の巨大な肥えた脚がはみ出していて、履くときに引っ張り上げるために使うループを中に押し込むことができないうらみきっちりとはまっていた。そしてストックングを間に置いて膝のところで締める紐があり、青のエプロンは腰の周りにたくし上げられ、赤いネッカチーフと青い上着を身に着けて、白い帽子を頭の片側に差し込んで、彼は、まるでこれ以上に幸福で快適であることなど夢想だにしたことがないかのように口笛を吹きながら、大きな赤ら顔いっぱいのにこにこ笑いを浮かべてそこに立っているのであった。

これこそ我々の心にかなう人物であった。我々は彼のことはすべて知っていた。我々は彼が、太ってずんぐりした小さな馬に引かれた自分の緑色の二輪馬車に乗って、コヴェントガーデンにやってくるのを五百回も見たことがあったのだ。そして、我々が彼のブーツに愛情をこめた一瞥を投げかけているまさにその瞬間に、一人のコケティッシュな女中の姿が、その傍に置いてあったデンマークサテンの靴に突然飛び込んだ。そして、この女中というのは、ついこの前の火曜日の朝にリッチモンドから町へ乗り入れた時に、ハマースミスの吊橋のちょうどこちら側で、乗らないかという彼の申し出を受け入れたあの娘であることが、我々にはすぐに分かったのである。

派手なボンネットをかぶった非常に粹な女性が、トップブーツの反対側でわざとらしく爪先を突き出していた、黒い縁と縁飾りのついたグレーの布長靴に脚を入れ、しきりに彼の注意をひきたがっているようであったが、我々の友人たる市場園芸業者は、この誘惑に少しも魅了されたようには見受けられなかった。

というのは、誘惑が最初に開始されたとき、自分はその目的も対象もよく理解しているのだというかのように、わけ知り顔でウインクしてやった以外は、それ以上全く注意を払わなかったからである。しかしながら、彼の無関心をたっぷり埋め合わせするかのように、頭部が銀のステッキを持ったひどく年老いた紳士が、棚の一隅に置かれてあった大きなへり地の靴によるよると入りこんで、布長靴を履いたご婦人への自分の賞賛の気持ちを表す様々な身振りで、しきりに愁波を送ったものだから、我々が長い腰革のついたパンプスを履かせてやった若者がたいへんに面白がり、彼に身に着けさせるためすべり降りてきた上着が引き裂かれてしまうのではないかと我々が思ったほど、大笑いしたのであった。

我々は暫くの間このちょっとした無言劇を大いに満足して見物していたのであるが、その時、何とも名状しがたい驚嘆すべきことが起った。この登場人物たち全員、我々が急いで動員できるかぎりのありとあらゆる人間の足を突っこんで背景にしていた、その他大勢の無数のブーツや靴までも含めた全員が、ダンスをするための体勢を整え始めたのであった。しかもその時何かの音楽が奏でられ始めたので、彼らはただちにそれに合わせて踊りだした。例の市場園芸業者の軽やかな身のこなしを見るのはこの上なく楽しいものである。さっとブーツが突き出され、最初は片側に、次は反対側に、それからカットして、すり足をして、それから例のデンマークサテンの娘に調子を合わせ、次には前進し、かと思えば後退し、それからぐるりと回転して、続いてこの旋回動作をもう一度繰り返す。しかも、この激しい運動で疲れた気配など毛ほども見えないのであった。

お相手のデンマークサテンの方も少しも後れは取っちゃいない。それというのも、彼らはありとあらゆる方向にジャンプし、跳びはねていたからである。そして彼らは布長靴の女ほど規則正しくもなく、テンポに合ってもいなかったのだけれど、それでもなお、心底からそれをやっているように見えたし、さらに一層それを楽しんでいるように見えたので、我々は彼らのダンス様式の方が他のものよりも好ましく思われたことを率直に告白しよう。しかし、例のへり地の靴の老紳士こそ全員の中でいちばん面白いしろものであった。というのも、彼は若くて恋をしているというふうに見せようとグロテスクな試みをしていて、それだけでもう十分に楽しませくれるものであったのだが、この老紳士が布長靴のご婦人に挨拶しようと前進する度ごとに、例のパンプスを履いた若者が実に巧妙なタイミングで、この老人の足を全体重をかけて踏みつけるものだから、彼は苦痛で大声を発し、他のすべての者たちは死ぬほど笑いころげるのであった。

こういった浮かれ騒ぎを我々が思う存分楽しんでたとき、甲高い、しかも決して音楽的とは言えない声が、「覚えてらっしゃいよ、何であつかましい！」と叫ぶのが聞こえたので、いったいどこからこの音が発せられたのであろうかと、前方を目をこらして見てみると、我々はそれが、最初そうではないかと予想したように布長靴の女から発せられたのではなく、貯蔵室の階段の上に置かれた椅子に、どうやらここに陳列されている品物の販売を監督するという目的で座って

いる、年配らしい太ったご婦人から発せられたものだったのである。

この妨害が入ると、我々の背後で威勢よく奏でられていたパレルオルガンは演奏をやめ、我々が靴や長靴にはめこんでいた人々も退散した。そして、我々自身も、瞑想に深く沈みこんでいたあまり、それとは気がつかずにこの老婦人を半時間もの間ぶしつけにも凝視していたことに気づいて、あわてて遁走し、隣接したダイヤルズ地区の奥深い闇へとすぐに姿を消したのであった。

民法博士会館

[民法博士会館Doctors' Commons は、教会関係や名誉毀損の訴訟、結婚許可証の発行や遺言の登録・閲覧などを行う一種の民事裁判所。1768年創立。1857年解体。ディケンズは作家になる前にここに速記者として出入りしていた。彼にとってはおなじみの場所である。]

少し以前に、これといった目的もなく、セントポール・チャーチヤードを歩いていたとき、我々は偶然「ポールの鎖」という名称の通りに入り、数百ヤードまっすぐに前進したところ、当然の結果として、民法博士会館に到達したのであった。現在では民法博士会館というのは、恋患いのカップルに結婚許可を、不貞なカップルには離婚許可を与えたり、何か残すべき財産のある人間の遺言を登録したり、ご婦人に不快な悪口を言った性急な紳士を罰したりする場所として、誰にでもその名が知られている場所であるので、我々は本当にその近辺にいることに気がつくとすぐに、それとお近付きになりたいという称賛すべき欲望を感じたのであった。そして、我々の好奇心の最初の対象は、その判決によって夫婦のきずなすらもゆるめることができるという法廷であったので、そちらへの案内を乞い、ただちにその方向へ足を向けたのである。

石が敷き詰められ、そのドアにはさまざまな学識豊かな民法学者の名前が描いてある古い煉瓦の建物が周囲にそびえた、静かで木陰の多い中庭を横切り、我々は小さな、緑のペーズで覆われ、真鍮の釘が打ち込まれたドアの前に立ち止まった。そのドアをそっと開けると、すぐに古い奇妙な外見の、くぼんだ窓と黒い彫刻された羽目板のある部屋があり、その奥の方の端には半円形の一段高い壇の上に、緋色のガウンとかつらを着けた十数人の厳粛な様子の紳士たちが座っていた。

中央のさらに高くなったデスクには鼈甲の眼鏡をかけたひどく太った赤ら顔の紳士が座っており、威厳に満ちた様子から判事であることが分かった。そして、下の方の、クッションやポケットのない玉突き用テーブルのような、長い、緑のペーズで覆われたテーブルには、固い首巻きと白い毛皮のカラーの付いた黒のガウンを着た、ひどくもったいぶった様子の連中がいて、我々はただちに彼ら

は代訴人であると断定した。この玉突き台の下の端にはかつらを付け、肘掛け椅子に座った人物がいて、これは後で登録官であることが分かった。そして、ドアの近くの小さなデスクには、十四ストーン [重量の単位、1ストーンは十四ポンド (六・三五キログラム)] かそらの体重の黒服の立派そうな紳士と黒のガウン、黒のキッド革の手袋、半ズボンに絹の服、シャツのフリルを胸につけ、髪の毛は巻き毛、手には銀の杖という、太った顔つきの、作り笑いを浮かべた礼儀正しそうな人物がいて、これはすぐに廷吏であることが分かった。実際、後者はすぐにこの点に関して我々を納得させてくれた。というのも、彼は我々の傍に近付いてきて、すぐに会話を始めると、五分もしないうちに、自分が伝達吏であり、もう一人の方は法廷看守吏であることを伝えてくれたからである。それから、これはアーチ法廷 [宗教法廷] であって、だから弁護士は赤のガウンを着ており、代訴人は毛皮のカラーをしているのだとか、他の法廷がここで開廷するときには、赤のガウンも着ないし、毛皮のカラーもつけないのだとか、その他いろいろな同じくらい興味深い情報を伝えてくれたのである。これらの二人の廷吏の他に長い灰色がかった髪をした、小柄な痩せた老人が、遠い隅にうずくまっていた、我々の話し好きの友人が教えてくれたところでは、彼の仕事は朝法廷が開廷するとき大きな振鈴を鳴らすことであった。この男は、その外見がそれとは正反対のことを示していたとしても、少なくとも過去二世紀にわたって同じ仕事をしてきたように思われた。

鼈甲の眼鏡をかけた赤ら顔の紳士は、ちょうどその時一人だけでしゃべっており、しかもたいへんうまくやってもいたのであるが、ただ、早口すぎるのであった。しかし、それも習慣というものだし、かなり不明瞭でもあったが、それも生活がよいためであろう。そこで、我々には周囲を見回す時間がたっぷりあった。我々を非常に面白がらせた一人の人物がいた。これは、赤いローブを着たかつらの紳士たちのうちの一人で、彼は真鍮製の巨人のような姿勢で、他の人間を完全に排除して、法廷の中央の暖炉の前に両足を広げて座っているのであった。彼は、ひどく悪天候の日にはだらしな女がベチコート进行をそうするのと同じようなやり方で、ローブを背後にたくしあげて、暖炉の暖かさを十分に感じられるようにしていた。彼のかつらはすっかり斜めになってしまっていて、尻尾の部分が首のまわりに垂れ下がっていた。この上もなく悪い仕立ての彼の貧弱な灰色のズボンと短い黒のゲートルが、彼の不格好な体をさらにいっそう野暮な様子に見せていたのであった。そして、彼のぐにゃぐにゃで糊のきいていないシャツのカラーが彼の両眼をほとんど覆い隠してしまっていた。我々は二度と再び人相学者としての信用を得ることはできないであろう。というのは、この紳士の表情を注意深く調べた後、我々はその中には自惚れと愚劣さ以外の何物もないという結論に達していたのであるが、その時銀の杖を持った我々の友人が、彼は他ならぬ民法博士その人であり、他にもいろいろと肩書があるのだと我々に耳打ちしてくれたからである。そんなわけで、もちろん我々は間違っていたのであり、彼は

非常に才能豊かな人物に違いないのであった。しかし、彼はそのことをあまりにも巧みに隠しているので——多分、普通の人間をあまりひどくびっくりさせないようにという思いやりからであろうが——人は彼のことをこの世の中で一番の間抜けと思ってしまうことだろう。

眼鏡の紳士が判決を終え、法廷の騒音が静まるための時間を与えるために数分が経過したところで、登録官が次の訴訟、「バンブルによりスラッドベリーに対して起訴された審理の件」を告げた。この宣告を聞いて法廷では皆が動くのが見られ、銀の杖を持った世話焼きの役人が我々に「こいつは喧嘩の訴訟だから、今に面白いものが見れますぜ」とささやいた。

この情報のおかげで我々が事情に通じることができたというわけではなかったが、やがて、宗教裁判原告側弁護人の冒頭陳述によって、次のようなことが分かった。エドワード何世かが作った半分時代遅れの勅令により、この法廷には、あらゆる教会またはそれに付属する聖具室において「喧嘩」をしたり「殴打」したりした、いかなる人間に対しても破門という処罰を下す権限があるのであった。そして、きちんと言及されたおよそ二十八の宣誓供述書によれば、ある晩、特に示されたある教区のある教区民会議において、この訴訟の被告たるトーマス・スラッドベリーが、原告マイケル・バンブルに対して、「くたばちめえ」という言葉を使用しかつ適用したということであり、また、前出のマイケル・バンブル及びその他の者たちが前出のトーマススラッドベリーに対して、彼の振舞いの不穏当性を非難したところ、前出のトーマス・スラッドベリーは前記の「くたばちめえ」という表現を繰り返したのである。そして、その上に、前出のマイケル・バンブルが「いっちょうやろうってえのか」どうかを知ることを欲しかつ要求し、さらに付け加えて、「前出のマイケル・バンブルがいっちょうやりてえっていうのなら、このおれ、すなわち前出のトーマス・スラッドベリーが、そいつを食らわしてやる」と述べた。同時にその他の憎むべき罪深い表現を用いたのであり、それらすべてが法律の内容と趣旨とに触れるものである、とバンブルは陳述した。それゆえ彼は、魂の平安とスラッドベリーへの懲らしめのために、ここに彼に対する破門の判決を要請する次第であります。

これらの事実に関して、双方から長い議論が行われ、法廷に集まった、この教区内騒動に興味を持っている多くの人々を大いに啓発したのであった。そして、原告側、被告側それぞれに何か非常に長く厳粛な弁論が展開された後、鼈甲眼鏡の紳士が訴訟の審理を開始し、それが三十分以上かかり、それからスラッドベリーに対して二週間の破門と訴訟費用の負担という恐ろしい判決を言い渡したのであった。これを受けてスラッドベリーは——この男は小柄で赤ら顔の抜け目なさそうなジンジャービール売りであったのだが——法廷に対して意見陳述を行い、訴訟費用を免除していただいて、その代りに終身の破門ということにしたいだけは大変ありがたいえんですがねえ、何しろ自分はぜんぜん教会には行っていないもんですけん、と述べたのである。この申立てに対して、眼鏡の紳士は、

高潔な怒りの表情を見せただけで何も答えなかった。そして、スラッドベリーとその友人たちは引き下がった。銀の杖の男が法廷は間もなく閉廷となると教えてくれたので、我々も引き下がった。そして、歩きながら、これらの古式ゆかしい教会法の美しき精神とか、それが喚起するはずの思いやりのある隣人らしい感情とか、それが必ず生み出すであろう宗教的諸制度への強烈な愛着心とかについて思いをめぐらしたのであった。

我々はすっかりこうした瞑想に耽り込んでしまっていたので、通りの方に出てしまい、どこに向って歩いているのかに気付く間もなく、一つの戸口の側柱にぶつかってしまった。我々はいかなる家に出くわしたのであろうかと上の方を見てみると、大きな文字で書かれた「遺言事件裁判所」という言葉が見えた。そして、観光気分であったことだし、そこは公共の場所であったので、我々は何に中に入っていた。

我々が入り込んだ部屋は長く、忙しそうに見える場所で、両側には様々な小さなボックスに仕切られており、そこでは数人の事務員が証書を筆写したり、検査したりしていた。部屋の中央奥にはほとんど胸元までの高さのいくつかのデスクがあって、そこでは三、四人の人々が立って、大きな本を調べていた。我々には彼らが遺言を探していることが分かったので、彼らはすぐに我々の注意を引いた。

何か法律上の目的で検索をしている事務弁護士事務員たちがのろろと無関心そうにしているのと比べて、誰か亡くなった親戚の遺書を探してここにやって来たよそ者たちが、特徴的な熱心さと興味を示しているのは面白い対照であった。前者の方は、時々いらだったようなあくびをして手を休めたり、頭を上げては部屋を往来する人々を眺めたりしており、一方後者は本の上にかがみこんで、一心不乱に名前の並んだコラムを次々に調べていたのであった。

青いエプロンをした一人の小柄な汚れた顔つきの男がいて、彼はおよそ過去五十年間にわたる午前中いっぱいかけた探索の末に、彼が参照しがっていた遺書をまさに発見したところであり、その遺書を官吏の一人が大きな留め金のついた分厚い子牛革装丁の本の中から低い急いだ声で彼に読み上げていた。官吏が読み進むにつれて、青エプロンの男がますますその内容が理解できなくなってゆくのは完全に明らかであった。その本が最初に持って来られたとき、彼は帽子を取り、髪をなでつけて、大いに自己満足している微笑みを浮かべ、耳にする言葉の一つ一つをすべて記憶することに決心したという風に、読み上げ官の顔を見上げたのであった。最初の二、三行は十分理解できるものだった。しかし、それから専門的表現が始まると、その小男はかなり疑わしうに見え始めた。それから複雑な信託に関する記述が長々と続き、彼は完全に途方に暮れてしまったのである。読み上げ官が読み進むにつれて、どうしようもなくなったことは明らかであり、口をあぐりと開け、両目を彼の顔にじっと据えたこの小男の困惑と当惑の表情は、たまらないほど滑稽なものであった。

少し離れた所では、皺が深く刻まれた顔をした人相のよくない老人が、角ぶ

ち眼鏡を使って長文の遺言を熱心に読んでいた。時々仕事を中断しては、その中に含まれている遺贈項目についての何か短いメモを陰険な表情で取るのであった。彼の歯の抜けた口、鋭く用心深い目の周囲の皺の一つ一つが貧欲と狡猾を物語っていた。彼の衣服はほとんどすりきれていたが、彼がそれを身に着けているのは好みからであって、必要に迫られた結果ではないことは、容易に見てとれた。彼が時々小さなブリキの缶から取り出すごくわずかなかき煙草に至るまでの、すべての外見と身振りが富と吝嗇と貧欲とを物語っていた。

彼が悠々と登録簿を閉じ、眼鏡を取り上げ、メモの紙片を大きな革の紙入れにたたみこむのを見ると、我々は、彼がどこかの困窮している遺産受取人に対して、どれほど素晴らしく厳しい取引条件を突き付けていることだろうかと考えた。その遺産受取人は、何かの生涯不動産が舞い込むまで何年も待ち続けるに疲れてしまって、自分の持つ可能性を、ちょうどそれがきわめて価値が高くなり始めたときに、その十二分の一の値段で売り払おうとしているのだ。それはうまみのある投機であったし、しかも、きわめて安全なものだった。老人は紙入れを大外套の胸に注意深くしまいこみ、勝ち誇った意地悪い眼差しでよろよろと歩き去った。この遺言のお蔭で彼は、最低に見積もっても、十歳は若返ったのである。

我々はこうして観察を開始した以上、少なくとも更に一ダースほどの人々に間違いなく注意を向けたはずであった。ところが、虫の食った古い本が突然閉じられ、片付けられ始めたので、閉庁時間になったことが分かった。かくして、我々は一つの楽しみを奪われ、読者は災難を免れることとなったのである。

家路を辿りながら、我々は当然ながら、いろいろなことを思いめぐらしたのであった。えこひいきと嫌悪の奇妙な古い記録、これらの保管所が包含している、嫉妬や復讐、死の力さえものともしない愛情と墓場の先までも追及する憎しみなどの記録について考えたのである。その中のあるものは高潔な心と高貴な魂の、もの言わぬ、しかし顕著な証拠であり、一方あるものは人間性の最悪の激情の陰鬱な実例なのである。どれほど多くの人間が、死の床でももの言えずに無力に横たわっているときに、気力と体力がありさえすれば、今民法博士会館に不利な証拠として登録されている、敵意と悪意の沈黙の証拠を消し去ってしまうためなら、いかなる犠牲もいとわないと思うことだろうか。

ロンドンのレクリエーション

生活程度がどちらかといえば低い階級の人々が、幸運のおかげで自分たちの上に立つことになった人々の生活様式や慣習を真似したいという願望は、しばしば話の種になるものだし、また、苦情の種になることも少なくない。このような性向は中産階級の中でも小市民階級、すなわち貴族気取りの連中の中にも存

在する可能性があり、また、疑いもなく存在する。流行の小説を読む家族と、貸出図書館の図書購読者である娘たちを持つ商人や事務員が、アルマック [上流階級の社交場]をつつましく模倣した集会を催し、上流社会の間人どもと愚か者どもが集うあの高級社交場で自分たちの偉容を示すという特権を持った羨むべき少数者にひけをとらないほどの自己満足をもって、どこかの二流ホテルの薄汚れた「大部屋」を闊歩するのである。どこかの「上流社会の慈善バザー」についての華々しい記事を読んだ野心的な若い娘たちは、突然どうしようもなく慈善熱に浮かされる。男たちから崇拜されて結婚にゴールインという幻想が眼前に漂う。どこかの素晴らしく称賛に値する施設、世にも奇怪な偶然のためにこれまで一度も聞いたことのない立派な施設が困窮した状態にあることが発見される。ただちにトムソンの大広間かジョンソンの養樹園が予約され、前述の若い娘たちは、全くの博愛精神からであるが、一人一シリングという小額の料金を、三日の間自分たちを展示することになるのである。しかしながら、これらの社会階級と少数の弱々しく取るに足らない人物たちを除けば、今言及したような模倣の試みが広汎に行われているとは、我々は考えない。レクリエーションの性格が階級が異なればまた異なるということが、しばしば我々を面白がらせてくれたものである。そこで、読者諸君にも何か面白いと思っていただけたところがあるのではないかと希望して、これをこのスケッチの主題に選んだ次第である。

五時にロイズを退社して、ハックニー、クラブトン、スタンフォード・ヒルその他の場所にある自宅へ帰るといふ、シティに常勤の実業家に、晚餐以外に毎日のレクリエーションがあるとすれば、彼の庭がそれである。彼は自分の手で庭に何か手入れするという事は決してないが、それにもかかわらず、庭を大いに誇りにしている。そして、もし君が彼の一番末の娘に求愛しているならば、庭にあるありとあらゆる花や灌木に狂喜するようにならなければならない。君の貧しい表現力で彼の庭と彼のワインの二つに区別をつけるように迫られたならば、庭の方をより称賛したまえ。彼は朝出勤前にいつも庭の中を散歩し、養魚池が特にきちんとした状態に保たれるように特別な配慮を払っている。夏の日曜日の夕食の一時間後くらいに彼のところを訪問すると、彼は麦藁帽子をかぶり、日曜新聞を読みながら、家の裏手の芝生の上の肘掛け椅子に座っていることだろう。ちょっと離れたところには、大きな真鍮の籠に入った美しいインコがいるのを、おそらく君は見るであろう。また二人の年長の娘たちが二人の若い紳士に伴われて歩道の一つでぶらぶら歩いているのがきくと見かけられるだろう。若い紳士たちはパラソルを彼女たちの上にかかっているが、それはもちろん日差しを避けるためだ。一方、幼い子供たちは下働きの子守女中と一緒に、木陰を退屈そうに散歩している。こういった場合をのぞけば、彼の庭に対する喜びは、実際にそれを享受することよりも、それを所有しているという意識から生まれるように思われる。ウイークデーに君を馬車に乗せて晚餐に連れ帰る時など、彼は午前中の仕事でかなり疲れており、おまけに相当不機嫌である。しかし、食卓が片付け

られ、お気に入りのポートワインを三、四杯飲んだ後、彼は食堂（もちろんそこは庭に面している）のフランス窓を開けるように命じ、頭に絹のハンカチを投げかけ、肘掛け椅子に寄り掛かって、庭の美しさやそれを維持するための費用について長々と詳述するのである。この一家の若い友人たる君に対して、庭の素晴らしさとその所有者の富についての正しい認識を持たせてやろうというつもりである。そして、この話題を話し尽くしてしまうと、彼は床につくのである。

やはり自分の庭をレクリエーションにしているもう一つの、非常に異なる種類の人々がいる。この種類の人間の一人は、町から少し離れた場所、例えばハムステッド・ロードとか、キルバーン・ロードなど、小さくきれいな家並みと小さな裏庭がある道沿いに住んでいる。彼とその妻——彼自身と同じように清潔で小じんまりとした小柄な女だが——彼らは、彼が二十年前に退職して以来、ずっと同じ家に住んでいる。彼らには家族はない。かつて息子が一人いたのだが、五歳くらいのときに死んでしまったのであった。肖像画が一番いい居間のマントルピースの上に掲げられていて、その子がよく引っ張り回していた小さな荷車は形見として大切に保存されている。

天候がよいと、この老紳士はほとんどいつも庭に出ている。そして、雨がひどくて出られない時には、一度に何時間も窓から庭を見ているのである。彼はいつも庭でする仕事何かあって、そこでいかにも楽しそうに、掘ったり掃いたり、切ったり植えたりしているのが見られるだろう。春には種を蒔き、その上にまるで墓碑銘のような、ラベルの付いた小さな木片を突き刺しておいたりする仕事がいくらでもあるのだ。そして、太陽が沈んで夜になっても、彼が大きなじょうろを忍耐強くぐいぐい持ち歩いているのには全く驚かされる。彼のそれ以外の唯一のレクリエーションは新聞である。彼は新聞を毎日最初から最後まで熟読し、最も興味深いニュースを、たいていは朝食の時に、妻に読んで聞かせるのである。老婦人の方は、居間の窓に置かれたヒヤシンスの花瓶や小さな前庭に置かれたゼラニウムの鉢が示しているように、たいへん花が好きである。彼女は庭もたいへん誇りにしている。そして、四本ある果樹の一つがいつもよりかなり大きなスグリの実をつけると、サイドボードの上のワイングラスの下に注意深く保存されて、客が来るとそれを見せて、誰それさんがご自分の手でこの実のなった木を植えて下さったんですよ、ときちんと説明するのである。夏の晩、例の大きなじょうろに水が満たされ、また空にされることがおよそ十四回も繰り返されて、この老夫婦がちょこちょこ動き回るのにすっかりくたびれてしまうと、二人が小さなあずまやに幸福そうな様子で一緒に腰を下ろし、夕暮れの静けさと平穏を楽しみ、影が庭に落ちて、しだいに濃く暗くなって、最も華やかな花の色合いを曇らせてゆくのを見つめている姿が見られるであろう。彼らの頭上を静かに過ぎていった幾星霜、遙か昔に薄れて消え去った若い頃の希望や感情の最も輝かしい色合いをその流れの中であせさせていった歳月をよく象徴するものである。これが二人の唯一のレクリエーションであり、彼らはそれ以上を必要とは



しないのだ。慰めと満足の材料は自分たち自身の中にあるのであり、唯一の心配といえは二人のどちらかが先に死んでしまうということなのである。

これは別に理想的なスケッチではない。昔はこのような種類の老人たちがたくさんいたものだった。その数は今では少なくなってしまったかもしれないし、これから更にいっそう減ってしまうかもしれない。婦人教育の最近の動向、すなわち軽佻浮薄な事どもや中身のない無意味な事どもを追求しているために、最も混雑した社交場などよりも女性がそこでこそはるかに美しく光り輝く、あの静かな家庭生活に向かないように女性をしむけてしまっているのかどうかという問題は、議論したところで我々はほとんど満足を感じないであろう。そうでないことを願うのみだ。

さて今度はロンドンの住民の別の部分に目を向けてみよう。この連中のレク

リエーションときたら、およそ考えられないほど強烈な対照をなしているのだ。つまり、日曜日の娯楽のことなのだが、読者諸君は、どこかよく知られた田園のティーガーデンで我々の傍に立っているものと想像していただきたい。

この日の午後の暑さはたいへんなもので、次から次に新たな一団が加わってくる群衆は、最近ペンキが塗られたばかりで灼熱しているように見えるテーブルと同じくらい熱しているのであった。何たる埃と騒音であろう。男たちに女たち、少年少女、恋人たちと夫婦たち、腕に抱かれた赤ん坊や遊覧馬車に乗った子供たち、パイプにエビ、葉巻にタマキビガイ、お茶に煙草。人目を引くようなチョッキと鋼の懐中時計鎖を着けた紳士たちが、びっくりするほどの威厳をもって(あるいは隣のボックスの紳士が冗談めかして言ったところでは、「えらく見栄張ってやがる」というところだが)、三人並んで練り歩き、まるで小さなテーブルクロスのような大きくて長い、白のハンカチーフを手に持った女たちが、この前述の紳士たちの注意を引こうとして、ひどくふざけた興味深いやり方で芝生の上で追いかけてっこをしている。いずれは夫になろうという連中は、自分たちの愛情の対象たる女性たちのために、費用のことなど気前よく無視してジンジャービールを注文している。そして、これらの女性たちは、自分たち自身の身体的健康とその結果の快適さなど同様におかまいなく、大量の「エビ」とか「タマキビガイ」を流し込んでいる。大きなシルクハットを頭の上にあぶなっかしく載せている少年たちは、葉巻をふかしながら、それがいかにも美味いと思っているようなふりをしようと努力している。ピンクのシャツと青のチョッキを着た紳士たちは自分のステッキで自分自身かあるいは他の誰かをひっくり返している。

これらの人々のおめかし振りには思わず苦笑させられるところもあるが、彼らは皆清潔で、幸福で、親切で社交的な気分である。あの二人の、粋なペリースに身を包み、四語ごとに「奥様」という言葉を差し挟んで、ひどく親密そうにおしゃべりしている母親らしい女性たちは、約十五分前に知り合ったばかりである。それは二人のうちの一人の子供である小さな少年が称賛されたことから始まったのである。ほら、あの黒の羽飾りのついた三角のサテンの帽子をかぶっている、人間の小標本だ。パイプをくゆらしながら、行ったり来たりしているあの青の上着とドラップのズボンを着けた二人の男は、彼らの夫たちだ。向い側のボックスにいる一行は、ここの客たち全体のかなりよい見本である。この連中の構成は、父親、母親、年老いた祖母、若い男と女、それに明らかにこの一行の中の才人であるらしい「ビル伯父さん」という響きのよい呼称で呼ばれる人物が一人というものだ。彼らはおよそ半ダースほどの子供たちを連れているが、これはここでは当たり前なことなので、ほとんど注目する必要がない事実である。結婚してある程度の期間経過している女性で「ティーガーデン」に来る女性はすべて、二、三回にわたって双子を生んだに違いない。そうでなければ、ここでの年少者の人口規模を説明することは不可能である。

ビル伯父さんの「お茶を四人分、それにバター付きパンを四十人分頼むよ」と

いう素敵な冗談を、言いようないほど面白がっている年老いた祖母を見てみたまえ。そして、彼が紙で作った「弁髪」を給仕のカラーに糊付けした結果、皆がどっと大声で笑い転げるのを見てみたまえ。あの若い男は明らかに、ビル伯父さんの姪と「お付き合い」をしている。そして、ビル伯父さんのほのめかし、「披露宴ではわしのことを忘れんでくれよ」とか「ケーキはわしが見張っといてやるからな、サリー」とか「お前の最初の子にはわしが名付け親になってやろう、きつと男の子に違いないぞ」といったほのめかしはどれも、若いカップルをどぎまぎさせるものであり、年長の者たちには楽しいものなのである。年老いた祖母はどうかといえば、彼女はすっかり有頂天になっていて、大笑いしては咳き込んでばかりいるのであった。やがて、彼らは、ビル伯父さんが、「夜風を閉め出すためと、こんなにびっくりするほど暑い日の締めくくりに気分快適にする」ために、お茶の後で「全員に一杯を」と注文した「砂糖入りのジンのお湯割り」を飲み終るのである。

暗くなりかけると、人々は動き始める。町に続く野原は人々でいっぱいだ。小さな手押し遊覧車は疲れた様子で引かれてゆき、子供たちも疲れていて、泣き声を上げることで自分自身や一行を楽しませてくれたり、眠り込むという、はるかに快適な手段に訴えたりしている。母親たちは早く家に帰り着きたいと思い始め、別れの時がやってくると恋人同志はますますもって感傷的になり、喫煙者たちの便宜のために木のところに吊り下げられている二つのランタンの光りに照らされた庭園は、ひどく物悲しげに見える。そして、この六時間というもの、絶え間なく走り回っていた給仕たちは、グラスと売上金を数えながら、少し疲れたなど感じるのである。